



吉田名歩

DZ21108

ひとつなぎ

ー 環境エンリッチメントを用いた動物保護施設の在り方 ー

Keywords

動物保護 保護施設 環境エンリッチメント
アニマルウェルフェア 心理学

1. はじめに

私自身、犬猫を飼育しているため近年メディアで取り上げられている動物愛護について関心を持つようになった。特にここ数年、新型コロナウイルスによる外出制限によりペット需要が増加し、安易なお迎えの問題が起っていた。しかし、犬・猫たちも命がある。現在は、人の命よりも軽く扱われているのではないかと感じている。そこで飼い主のいない犬・猫たちが保護される施設に焦点を当て、施設の在り方を再考する。

2. 研究背景

2.1 動物愛護センターについて（以降センターと呼ぶ）

動物愛護センターとは地方自治体が運営を行う「人と動物の調和のとれた共生社会の実現」に向けて取り組んでいる施設である。飼い主の死亡や飼育放棄などの人間の都合で飼えなくなった犬・猫を引取り保護している。

メリットは、税金を用いられているからこそ施設を持つことができ、基本的に自由に出入りができる。デメリットとすれば保護に関する知識を持った人が少ないことや利用者が少ないことが挙げられる。

(1) 殺処分数

殺処分数は年々減少傾向であるが、令和4年度の殺処分数は11,906匹で引き取り数のうち約2割の犬・猫が殺処分されている。

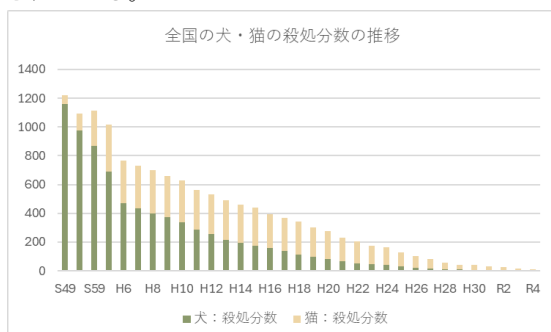


表 1 殺処分数

(2) 保護日数

保護日数については明確な基準はないが、原則として収容した日から7日間となっている施設が多い。

2.2 シェルター(民間団体)について

東京都に登録された動物愛護団体（飼い主探しを非営利の活動として行う団体）は、令和5年8月2日時点で48団体ある。その中でも、各々にシェルターを持っている場合は少ない。

メリットは保護に関するノウハウを持った人がたくさんいることである。デメリットは民間・NPOであるためお金がなく保護するにも経営困難な状態であり、シェルターがなく各家庭で保護が行われていることなどが挙げられる。

3. 研究目的

前述のようにそれぞれにメリット・デメリットがあり、現在はそれぞれが動物保護の活動を行っている。センターは犬・猫をシェルターに引き渡すことはしているが、確立した協力体制はあまりとられていない。そこで、センターとシェルターの協力体制が取れるような施設、かつ、動物たちが本来の姿で正しい飼い主の元へ引き渡すことが出来る動物保護施設を再考することをと目的としている。

4. 敷地

4.1 敷地概要

対象敷地として、東京都杉並区にある善福寺川緑地の一部とする。



図 1 広域図

4.2 敷地分析

善福寺川緑地は、善福寺池を源とする川沿いに2つの公園がある。上流にあるのが善福寺川緑地、下流に和田堀公園があり、善福寺川緑地のみで全長約3kmの細長い公園となっている。そのため、犬の散歩をしている人やランニングをしている人を多く見かける。また、周囲に小中高校があり通学路として利用されているため人通りが多い。

上記の特性を活かし、この公園内に動物保護施設を配置することによって認知度を高め、利用者を増加させることができるのではないかな。

5. 設計概要

5.1 プログラム

計画敷地面積：4533㎡

延べ床面積：約2000㎡ 一部3階建て

計画用途：動物保護施設、動物病院、
コミュニティセンター

5.2 設計手法

(1) 人慣れに応じた部屋分け

現在は、一律同じ場の個室にて保護がなされている。しかし、運動スペースなど犬・猫にとって必要な部屋が十分に取られていない。そこで、人慣れ度ごとに部屋を分け適切な環境下で保護することで、従来よりも早く人慣れをし、譲渡できる体制にすることを目的とする。

(2) 環境エンリッチメント

環境エンリッチメントとは、「動物福祉の立場から、飼育動物の“幸福な暮らし”を実現するための具体的な方策」のことを指す。具体的に「①空間 ②採食 ③社会 ④感覚 ⑤認知」の5つに分類される。

① 空間

水平移動、鉛直移動などの動物の行動特性に配慮した空間を作る。

② 採食

野生では食事をするのも一苦勞であり、その苦勞を再現する。

③ 社会

他の犬・猫との交流の機会を作り、動物本来の「社会性」を再現する。

④ 感覚

飼育環境を固定せず、「音」や「匂い」など五感に刺激を与えるように環境を変化させる。

⑤ 認知

複雑な装置や遊具など、動物自身が思考できる環境を作る。

(3) 行政と民間の協力

自治体と民間の動物保護団体が協力することにより、それぞれで不足している分を補うことができる。例えば、動物愛護センターでは基本的に譲渡に向けた訓練はしておらず、動物愛護団体に依頼し訓練をしていたが、民間の収容上限的にも自治体の施設にて動物愛護団体が訓練をすることができる。

(4) ゴーニング

鎌倉街道が南北に通っておりその通りにはバスが通っている。そのため、鎌倉街道側にコミュニティセンターを配置することによって市民と犬・猫との関わりを増やす。また、敷地の中心部に1.5次診療の動物病院を配置することで、すでに動物を飼っている人を引き込む。この病院を挟み犬と猫の人慣れをした子たちを配置することでお互いのストレスを減らすようにする。

7. 終わりに

殺処分0を達成するというのは不可能な話かもしれない。しかし、出来るだけ失われる命をなくし、本来暮らすべき人の元で暮らし生涯を終えることが一番望ましいことである。そこで本計画を通して動物保護施設の在り方をソフト面とハード面で再考し、不幸になる犬・猫が減ることを期待する。

参考文献

1) 環境省：動物愛護管理法の概要

https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/1_law/outline.html

2) 環境省：犬・猫の引取り及び負傷動物等の収容並びに処分の状況

<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/e8z/prs/r9715069.html>

3) 神奈川県ホームページ

<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/e8z/prs/r9715069.html>

4) 国土交通省：Park-PFI等の活用—公園と緑

https://www.mlit.go.jp/toshi/park/toshi_parkgreen_fr_000059.html

ひとつなぎ

～環境エンリッチメントを用いた動物保護施設の在り方～

殺処分や飼育放棄がいまだに多く、動物保護施設の立地や機能にも課題がある。
そこで、都内で緑が多い「善福寺川緑地内」で「動物保護施設」を再考する



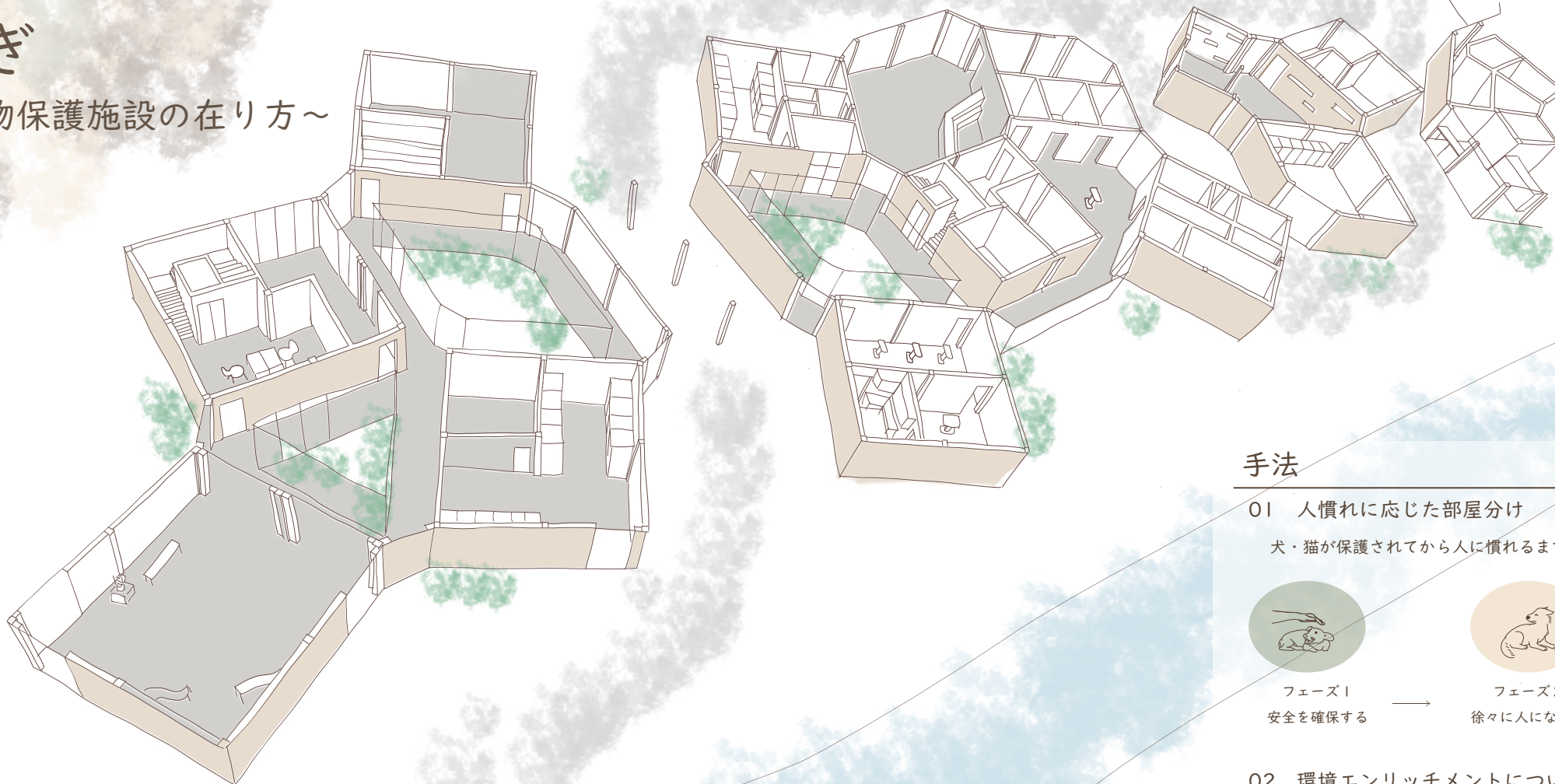
現在の首都圏にある施設はほとんどが郊外にありあまり利用者を見かけることが少なかった。殺処分数を減らすためにはそもそも施設を知ってもらわないといけないのではないか

敷地とした善福寺川緑地

この敷地は川沿いにある公園のためランニングしている人や、犬の散歩をしている人をよく見かけるため動物愛護センターを知ってもらうには適切ではないか



人々の関心が高まることで、譲渡率が向上し、殺処分の削減につながるのではないか



手法

01 人慣れに応じた部屋分け

犬・猫が保護されてから人に慣れるまでのプロセスを3つに分ける



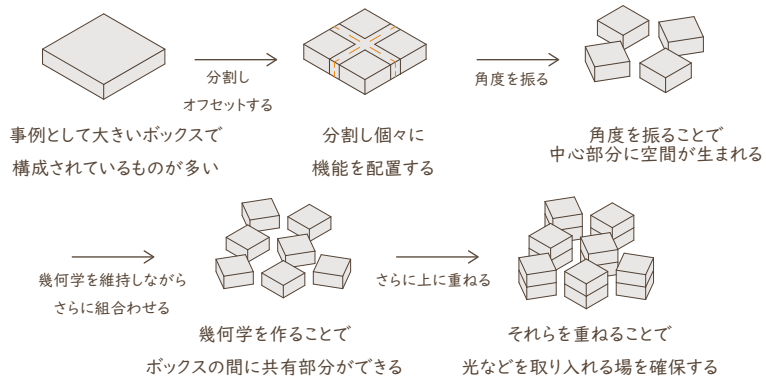
02 環境エンリッチメントについて

環境エンリッチメントとは、「動物福祉の立場から、飼育動物の“幸福な暮らし”を実現するための具体的な方策」のことを指す。
具体的に「①空間 ②採食 ③社会 ④感覚 ⑤認知」の5つに分類される。

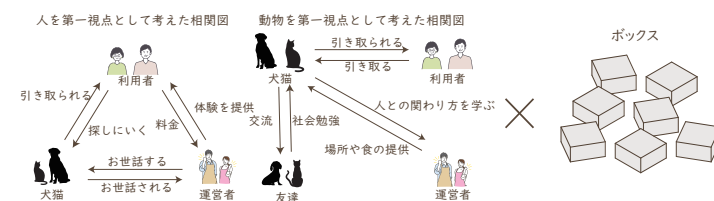


ダイアグラム

01 かたちのダイアグラム



02 関係ダイアグラム



関係ダイアグラムで利用者・運営者・犬・猫の関わりを考え、ボックスに適応させていく。
そうすることで適切な配置をすることができる

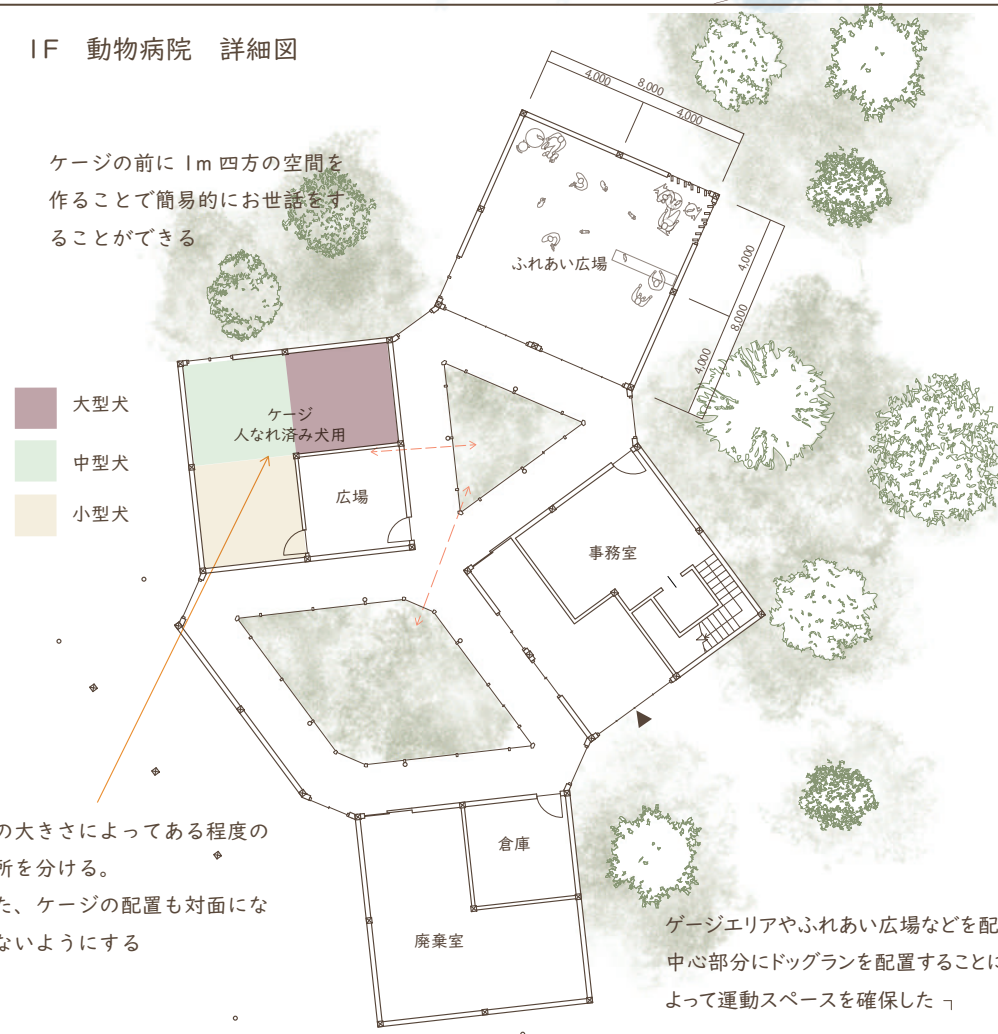
1F 動物病院 詳細図

ケージの前に1m四方の空間を作ることで簡易的にお世話をすることができる

大型犬
中型犬
小型犬

犬の大きさによってある程度の場所を分ける。
また、ケージの配置も対面にならないようにする

ゲージエリアやふれあい広場などを配置し、中心部分にドッグランを配置することによって運動スペースを確保した



少なからずキャリアを持った子はいる。しかし、隔離するのではなく普通の猫と同じように過ごせるようにする

猫は環境の変化を嫌うため、ケージエリアと相談室を隣にすることによってストレスを減らす

ケージエリア前に広い空間があるため猫を眺めながら休むことができる

吹き抜けを中心としてケージエリアを配置する。その中心に事務を配置するとでみわたせるようにした

